

写真1 / 落差102mの導水管の上に設置された駒橋発電所看板



写真2 / 変電所前庭では旧型タービンを展示（駒橋発電所）



電業特報・プチ特集 / 20.09

日本の初期発電事業を支えつつ今も現役 駒橋発電所・八ツ沢発電所施設を訪ねる ～明治から令和に至る歴史の生き証人～

☆国の文化財にして現役の発電システム

山梨県大月市にある東京電力駒橋発電所を訪ねました。駒橋発電所は山梨県を流れる桂川（相模川上流部）の水流を活用した水力発電所で、1907（明治40）年に建設されました。東京電力の前身・東京電燈の時代です。

駒橋発電所はいろいろな意味で画期的な水力発電所でした。落差102m、水量21 m³/sの水力発電システムをもち、6台の発電機で1万5,000kWの電力を出力。5万5,000Vの電圧で距離76km離れた東京（早稲田）まで送電を行い、日本で初めて長距離高圧送電を実現した水力発電所として、歴史にその名を残しています。

このデータが当時いかに傑出していたものであったか？ それは駒橋発電所の稼働以前の東京電燈の発電所建設史をみれば明らかです。



写真3 / 「東京送電水力発祥の地」と彫られた記念碑（駒橋）

東京電燈の創設は1886（明治19）年。翌年以降、2年間でまず5つの電燈局（火力発電所）を建設し、東京市内への送電を行います。これらの発電所の規模（発電能力）は以下の通りです（建設順）。

- ・第2電燈局（日本橋区 / 25kW 発電機4基）
- ・第1電燈局（麹町区 / 25kW 発電機11基）
- ・第5電燈局（北豊島郡千束 / 25kW 発電機4基）
- ・第3電燈局（京橋区 / 25kW 発電機4基）
- ・第4電燈局（神田区 / 25kW 発電機4基）

第2電燈局が最初に造られたのは送電エリアに商業の盛んな日本橋界限と鹿鳴館があったからとされます。次に第1電燈局が11台と突出した発電機数を備えていたのは、送電エリアに皇居と政財界人が多く住む麹町界限があったからとされます。

やがて電力需要が急増するに従い、これら5つの小規模発電所では間に合わなくなり、1895（明治28）年に浅草火力発電所を建設。第1～第5電燈局を廃し、東京市内への一括送電を開始します（建設当初の規模は200kW 発電機4基、265kW 発電機2基）。

しかし、その後も電力需要は商用・家庭用を問わずに急増し続けたため、駒橋発電所の建設が企画されたのです。浅草発電所は駒橋発電所が完成した後も予備発電所として稼働していましたが、1923（大正12）年に発生した関東大震災で瓦解してしまいます。

代わりに建設されたのが、後に「お化け煙突」で有